

常温貯蔵が可能な野菜セル苗の開発

セル育苗は広く普及していますが、栽植密度が高いために、降雨などにより移植適期を逃すと徒長しやすく、また、移植適期後の育苗の長期化は定植後の活着と生育を抑制することが知られています。

ブロッコリーを緩効性肥料を含む培養土に播種し、肥効が失われた後も灌水のみで育苗することで病害虫・水ストレスに強い硬くしまった苗が得られます。このような苗を常温貯蔵苗と呼んでいます。常温貯蔵苗を圃場に定植すると、適期に定植した慣行苗と比較し初期生育は遅れるものの同等の収量が得られます。ブロッコリー以外にもこのような育苗ができる品目があれば、セル苗の移植適期幅の拡大や播種時期の分散につながります。

そこで、スイートコーン、ナス、ピーマン、トマト、キャベツ、レタス、リーフレタス、ネギ、チンゲンサイ、ホウレンソウを用いてセル苗の長期常温貯蔵について検討しました。

育苗は雨よけハウス内で行いました。培養土は与作N-150を用い、灌水は発芽が揃うまでは頭上灌水、それ以降は底面給水で行いました。貯蔵苗区は播種後60あるいは80日間灌水のみで育苗しました。慣行苗区は品目により20、25あるいは50日間育苗し、播種後15日目以降5日おきに液肥を施用しました。写真1はキャベツの貯蔵苗と慣行苗の定植直前の様子です。

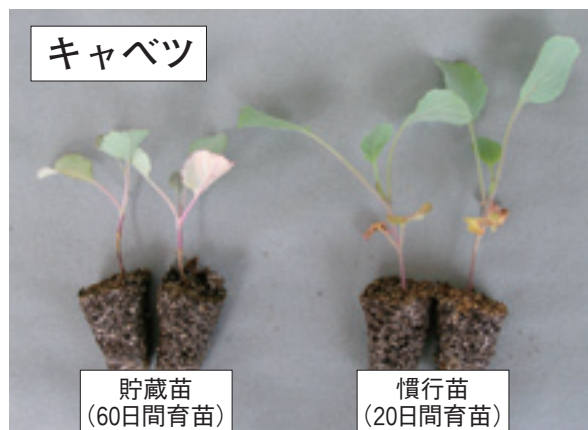


写真1. 定植時の苗の状態

貯蔵苗の草丈は図1のように播種後30日目頃から変化しなくなりました。圃場定植後、貯蔵苗は慣行苗より生育量は小さいもののほとんどの品目では正常に生育しました。しかし、スイートコーンとピーマンは貯蔵苗の生育は慣行苗に比べ著しく遅れました。レタスとリーフレタスの貯蔵苗は収穫前に抽台しました。

生育が遅れながらも正常な収穫に至った品目はナス、トマト、キャベツ、ネギ、チンゲンサイ、ホウレンソウでした。これらの品目では60あるいは80日間の常温貯蔵が可能であると考えられました。しかし、いずれの品目においても圃場定植後の初期生育向上を図る必要があります。今後は育苗後期の施肥方法の検討や播種時期の検討を行っていきます。

(野菜栽培チーム 米田祥二)

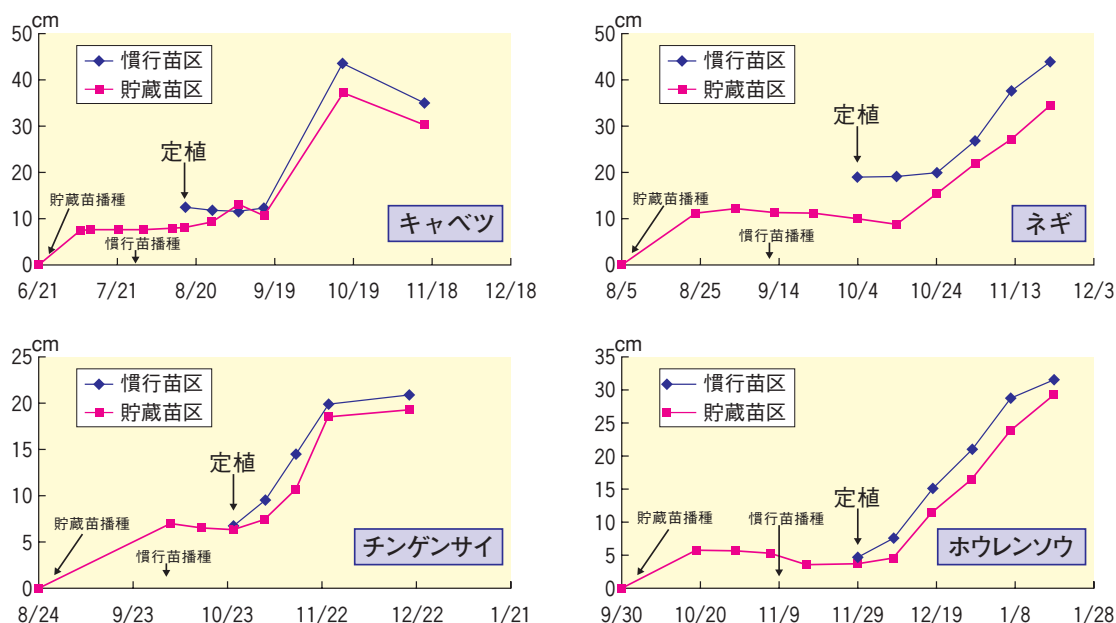


図1 育苗時および定植後の草丈の経時的変化